復活節第5主日　　2011/5/22

聖ヨハネによる福音書第14章1～14節

於:聖パウロ教会　司祭　山口千寿

わたしがまだ聖職候補生の頃、当時通っていた教会のキャンプで、１つのゲームをしたことがあります。それは、数人ごとにグループに分かれて、それぞれのグループが本とか積み木とか文房具とか、同じ材料を与えられます。そしてその材料を使ってあるオブジェ、作品を作ることが課題として出されます。

そのオブジェを作るのに、一定のルールがあります。ルールを守って作らなければなりません。それは、別室に同じ材料でもって、既にある形の作品、オブジェがこしらえてあります。それと同じものを作らなければならないのです。そして、別室にある既に出来上がっているオブジェを見ることができるのは、１人１回限りです。１つのグループから交代に見に行かなければなりません。同じグループから何人ものメンバーが、同時に一緒に見に行くことは許されません。見に行った時にメモなどは取ってはいけません。そして、全員が見終わってから、初めて作り始める作業に取りかかることができるのです。

このルールに従って順番に１人づつ別室に見に行くのですが、よく見て来たつもりでも、帰ってくると記憶が曖昧で、ちゃんと見て来ていないことに気がつくのです。積み木がどの方向を向いていたかとか、本は何ページが開いていたかなど、細かな点で不確かなことがいろいろと出てくるのです。見に行く人は、殆どの人が簡単に覚えて分かったつもりになるのですが、いざ、戻ってくると同じオブジェを作るのに迷いが生まれてきます。

わたしのいた同じグループの１人は、責任感が大変強い人であったのか、それともグループでの作業に貢献しようと張り切っていたのか、見に行った限り、なかなか帰ってきませんでした。グループの残された人たちは、その人が帰ってくるまで

皆、じーっと待っていましたが、ほかのメンバーがかかる時間の倍ぐらい経っても、まだ帰ってこないのです。だんだんと、遅いな、どうしてしまったのだろう、という気持ちになっていきました。グループの中に不安な気持ちが生まれて来たのです。

初めは、皆で協力して一つの作業をしよう、オブジェを作り上げるという目的に向かって協力していこうという気持ちでまとまっていたのが、一人のメンバーがしばらくの間、帰って来ない間に、一致協力して行こうという態勢が崩れて、目的の達成ということよりも、帰って来ない人に対する心配が、グループを支配してしまいました。

課題を達成しよう、１つの目的に向かって進んで行こうと、皆の心が集中している時に、１人その場から長時間、と言っても10分も経っていないのですが、いなくなることで、グループのまとまりが崩れてしまったのです。そんな経験をしたことがあります。

イエスさまの弟子たちのグループも、イエスさまがその中からおられなくなることによって、崩壊の道を辿って行ったのではないでしょうか。特に弟子たちのグループは、イエスさまの存在によって成り立っていたのですから、グループが成り立つ根拠となる人がいなくなれば、グループ自体の存立がいとも簡単に崩れ去るであろうことは、想像に難くありません。

実際、イエスさまがおられなくなった後の弟子たちは、聖霊が与えられるまでは、どのように生きて行ったら良いか分からないという、不安と混乱の中に時を過ごさざるを得なかったわけです。

今日の福音書の最初のみ言葉は、「心を騒がせるな」というイエスさまの弟子たちに対する説教ですが、弟子たちはイエスさまがおられなくなることを告げられて、心がバラバラになってしまったのです。イエスさまが中心におられる間は、目的に向かって進んで行こうと、皆の心が集中していましたが、それが失われると、その後はどのように行動したら良いか分からなくなってしまうのです。皆の心が分裂して、それぞれの方向を向いてしまうと、まとまって何かをしようとすることが難し

くなってしまいます。グループとして、このようにやって行こうとする決断ができなくなってしまうのです。

　そしてこのことは、グループとしてのまとまりについてだけではなく、弟子の一人一人についても同じことが言えるのです。イエスさまという目標が失われてしまった時、主体的に行動することができなくなってしまうのです。

　イエスさまは、ご自分が去られた後、弟子たちがどのような姿をさらすのか、良くご存知でした。それで、父なる神さまに、聖霊を遣わしていただくことを約束されたのです。弟子たちを、もう一度、一つに結び合わせるためです。弟子たちに対するイエスさまの深い配慮が、そこにはあったのです。

　話は変わりますが、心理学者の河合隼雄さんが、1990年代初期に書いていたことですが、当時、日本では青年の自殺率が非常に低くなっていると述べていました。しかし他方、中年の自殺率が逆に高くなっている。かつては青年時代に、誰もが人生について、自分の生き方について悩み、その中から悩みを克服して行くことを学んだわけですが、今日、青年時代には様々な技術の習得に追われて悩んでいる時間がない。それが中年になってから悩みを持つようになって、その結果が、中年の自殺率が高くなるという現象になって現れているのではないか、と言うのです。中年になってから、まだ、道を発見していないことに気づくのです。

　わたしたちは悩みを抱えると心が騒ぎます。平安が失われます。思い乱れます。わたしたちの人生には、このような心の騒ぐ時期が必ずあります。人生の歩みを平穏のうちに進めることが困難に思える出来事に遭遇します。そしてそのような渦中にある時には、自分が置かれた状況、或いは、自分に起こっている状態がどのようなものであるかを、眺めることがなかなかできないでいることが多いのです。焦れば焦るほど、もがけばもがくほど落ち込んだ穴ぼこから抜け出すことが難しく感じられるのです。

　同じ河合隼雄さんが『こころの処方箋』という本を書いていますが、その中に、「道草によってこそ『道』の味が分かる」という短い文章があります。その中で、

ある経営者のことを紹介しています。その方は趣味も広いし、人情味に溢れ、多くの人に尊敬されている立派な人物です。どうしてそのような豊かな生き方をされるようになりましたか、と尋ねたところ、「結核のおかげですよ」という答えが返ってきたそうです。

学生時代に結核を患い、当時は的確な治療法がなくて、ただ安静にしているほかなかった。若い時代に、ほかの若者たちがスポーツや勉強に励んでいるのを知りながら、自分は安静にしていなければならないというのは、大きな苦痛です。青年期の大切な時期を無駄に過ごしてしまっているという考えに苦しんだそうです。

ところが後に経営者になって成功を収めて振り返ると、結核になって人生の道草を食ったことが、無駄ではなかったことに気づくのです。むしろその経験があったからこそ、今の自分があると知ったのです。人に遅れを取る悔しさや、ほかの人ができることができないでいる辛さを味わったから、弱い人の気持ちが分かるし、死について、人生について悩んだことが意味を持ってくることになったのです。

河合さんは、この実業家の例を紹介し、次のように言っています。「目的地にいち早く着くことのみを考えている人は、道の味を知ることがないのである。」

信仰生活についても、優等生の道を歩めば、確かに間違いなく目的である神さまにに近づくことができるかもしれません。しかし、豊かな味わいに乏しいものになってしまうという、残念な結果を生むことになるかもしれません。回り道や道草は決して無駄なことではありません。

星野富弘さんのことはご存知だと思います。中学校の体育の教師となって体操の指導中に頸椎を損傷して手足の自由を失った方です。入院中に口に筆をくわえて絵や文を描き始め、それが美しい詩画集となって出版されています。その星野さんのエッセイに「鈴の鳴る道」というご自分の体験を綴ったものがあります。

車椅子になって気がついたことに、舗装道路でもいたる所に段があり大きく傾いている箇所があって怖い思いをするのです。でこぼこをなるべく避けて通るようにして来たら、いつの間にか、道にでこぼこがあると思っただけで暗い気持ちを抱く

ようになりました。ところがある人から銀色の美しい鈴を貰い、自分では振って音を出すことができないので、車椅子につけて揺れるのを見ようとします。道路を走っていると、小さなでこぼこがあり、それを慎重に通り抜けようとしたら、その時に車椅子につけていた鈴がチリンと鳴って、心に染みるような澄んだ音色を立てたのです。それを聞くことが楽しみとなるのです。

その体験から星野さんは思うのです。人は皆、この鈴のようなものを心の中に授かっているのではないだろうか。整えられた平らな道を行くだけでは鳴ることがないけれど、人生のでこぼこ道にさしかかった時に揺れて鳴る。美しく鳴らし続ける人もいれば、閉ざした心の奥に押さえ込んでしまう人もいるだろう。そう思うのです。

道を見出だすということは、自分を超えた視点から自分のことを見つめることができるようなることです。「わたしは道であり、真理であり、命である」と言われたイエスさまの道も、真っ平らな、ハイウェイのような道ではなかったでしょう。でこぼこがあり、曲がりくねり、立ち往生もしなければならないような道です。でも、そこを行く時に美しい音色の鈴が鳴る。そこを行かなければ、鈴の音色で慰められることも、それを楽しむこともないのです。

道であるイエスさまを見出すために、わたしたちも子どものように道草を楽しんだり、でこぼこ道を避けることなく歩んで行かなければなりません。それが一人一人の中に、生きた信仰を育むことになるのではないでしょうか。